

『大護明陀羅尼』注釈書と ヴァイシャーリー疫病消除説話

園 田 沙 弥 佳

1. はじめに

陀羅尼 dhāraṇī は密教において呪文の一種として考えられており、初期の密教經典の大部分は陀羅尼が含まれている。本来、陀羅尼を示すサンスクリットの dhāraṇī は語根√dhṛ より派生した語であり「憶持」の機能を意味していたが、後に除災招福や病氣平癒、守護等といった現世利益的な機能が付加されたと見られている。今回取り上げる『大護明陀羅尼』 Mahāmantrānusāriṇī¹ (Mahāmantrānudhārisūtra²) もまた、疫病の治癒に関する陀羅尼經典の一つである³。本陀羅尼は2種類の系統が存在しており⁴、両者の内容は大きく異なっている⁵。本論文ではサンスクリット・テキストと漢訳で内容が共通するものを「サンスクリット系統」、チベット語訳にのみ見られる内容のものを「チベット語訳系統」と称する。

サンスクリット系統『大護明陀羅尼』（以下、MN-A 本と称する）は、『根本説一切有部律』 Mūlasarvāstivādin-vinaya の「薬事」 Bhaiṣajyavastu、『ヴァイシャーリー・プラヴェーシャ』 Vaiśālīpraveśa-mahāsūtra（以下、VŚP と称する）の内容と関連することが、後述する先行研究で明らかとなっている。各經典を相互に比較すると内容に長短はあるものの、いずれも世尊がヴァイシャーリーの都で発生した疫病を退ける「ヴァイシャーリー疫病消除説話⁶」が説かれている。他方、チベット語訳系統の『大護明陀羅尼』（以下、MN-B 本と称する）の内容構成は MN-A 本と一致しないが⁷、疫病を鎮静させるための陀羅尼が説かれることが共通している。本經典の注釈書である『大秘密真言随持經十萬註』（Mahāmantrānudhāraṇīsūtra-śatasahasraṭīkā：以下、MN 十萬註と称する）は、上記 MN-A

* 本研究は JSPS 科研費 JP19K12950 の助成を受けたものである。

- 1 そのほか、Mahāmantrānusāriṇī-dhāraṇī (Bendall, Cecil. 1883, Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge, pp.105-106 等) という経題もみられる (塚本・松長・磯田 1989: 92-93)。
- 2 チベット語訳ではサンスクリット経題の音訳表記に複数の例がある。詳しくは本論文 2.2 にて取り上げる。
- 3 『大護明陀羅尼』は単独で存在する經典である一方、インド密教においては五護陀羅尼 Pañcarakṣā と呼ばれる 5 種の陀羅尼の集成に含まれている。
- 4 (Skilling 1992: 180-182) (奥山 1998)
- 5 (園田 2018)
- 6 これらに類する物語は「ヴァイシャーリー疫病消除説話」(奥山 1998: 76)、「ヴァイシャーリー疫病譚」(八尾 2013: 86) 等と呼ばれており、本論文では「ヴァイシャーリー疫病消除説話」と称する。
- 7 (Iwamoto 1937a: 序説) (Skilling 1992: 141-142) (奥山 1998) (園田 2018)

本と MN-B 本の両内容を注釈対象としている⁸ (以下表1 参照)。

サンスクリット・テキスト、漢訳	チベット語訳		
サンスクリット系統 Pañcarakṣā (五護陀羅尼)	チベット語訳系統 gZungs chen po lnga (五大陀羅尼)	サンスクリット系統 関連經典 (※1)	注釈書 (カルマヴァジュラ著)
①『大随求陀羅尼』(両系統で共通)			—
②『守護大千国土經』(両系統で共通)		—	『大千善摧經十萬註』 D, No. 2690 P, No. 3514 <i>Mahāsaḥasrapramardanī-sūtra-śatasahasraṭīkā</i>
③『孔雀王呪經』(両系統で共通)			『明呪王大孔雀經十萬註』 D, No. 2691 P, No. 3515 <i>Mahāmayūrīvidyārājñī-sūtra-śatasahasraṭīkā-nāma</i>
④『大寒林陀羅尼』(ŚV-A 本) Skt. <i>Mahāśītavaī</i> (Iwamoto1937b) (Hidas2017) Chi. 『大寒林聖難陀羅尼經』, 大正 21, No. 1392 宋法天訳 Ad.984	欠 (※2)	『聖持大杖陀羅尼』 <i>'Phags pa be con chen po shes bya ba 'i gzung</i> s (Ārya mahādaṇḍa nāma dhāraṇī,) D, No.606=958 P, No.308=58	『明呪大妃大寒林經十萬註』 Tib. <i>rig sngags kyi rgyal mo chen mo bsil ba 'i tshal gyi mdo 'i 'bum 'grel zhes bya ba</i> (<i>Mahāśītavatividyārājñī-sūtra-śatasahasraṭīkā-nāma</i>) D, No. 2693 P, No. 3517
欠	④『大寒林陀羅尼』(ŚV-B 本) <i>bSil ba 'i tshal chen po 'i mdo</i> (<i>Mahāśītavana sūtra</i> , 『大寒林經』) D, No.562 P, No.180	—	
⑤『大護明陀羅尼』(MN-A 本) Skt. <i>Mahāmantrānusāriṇī</i> (Skilling1994, 608-622) Chi. 『大護明大陀羅尼經』, 大正 20, No. 1048 宋法天訳 Ad.984	欠 (※3)	1. 『根本説一切有部律』 「薬事」 2. 『ヴァイシャリー・プラヴェーシヤ』 1. <i>Mūlasarvāstivādin-vinaya</i> , Bhaiṣajyavastu 2. <i>Vaiśālīpraveśa</i> (Skilling1994: 564-607)	『大秘密真言隨持經十萬註』 Tib. <i>gSang sngags chen mo rje su 'dzin ma 'i mdo 'i 'bum 'grel</i> (<i>Mahāmantrānudhāraṇī-sūtra-śatasahasraṭīkā</i>) D, No. 2692 P, No.3517
欠	⑤『大護明陀羅尼』(MN-B 本) <i>gSang sngags chen po rjes su 'dzin pa 'i mdo</i> (<i>Mahāmantrānudāri sūtra</i> , 『大真言隨持經』), D, No.563 P, No.181	—	

表 1. Pañcarakṣā 関連經典対照表⁹

(※1) …経題は異なるが内容はサンスクリット系統と関連する經典／(※2) … [園田 2021] において注釈書から注釈対象部分を抜粋・再構成した。／(※3) …本論文資料編において注釈書から注釈対象部分を抜粋・再構成した。

8 後述するカルマヴァジュラは、Mahāpratisarā『大随求陀羅尼』を除く以下4種の五護陀羅尼に関する注釈書を著している

Mahāsaḥasrapramardanī-sūtra-śatasahasraṭīkā 『大千善摧經十萬註』(D, No. 2690 P, No. 3514)、

Mahāmayūrīvidyārājñī-sūtra-śatasahasraṭīkā-nāma 『明呪王大孔雀經十萬註』(D, No. 2691 P, No. 3515)、

Mahāmantrānudhāraṇī-sūtra-śatasahasraṭīkā 『大秘密真言隨持經十萬註』(D, No. 2692 P, No. 3516)

Mahāśītavatividyārājñī-sūtra-śatasahasraṭīkā-nāma 『明呪大妃大寒林經十萬註』(D, No. 2693 P, No. 3517)

経題のサンスクリット表記は目録と原文に相違がある。例えば『大護明陀羅尼』は注釈原文で“Mahāmantranuphāraṇī-sūtrāṃti-sahasraṭīkā”と記されているところ、東北目録および大正目録における該当の語は“Mahāmantrānudhāraṇī-sūtra-śatasahasraṭīkā”と示される。なお、東北目録では原文のローマナイズが注記されている。

9 この表は [Iwamoto1938] [塚本・松長・磯田 1989] [Skilling 1992: 180-182] [奥山 1998] を基に筆者が作成した。

先行研究に関しては、[Skilling1994]によるMN-A本のサンスクリット・テキスト校訂、および、「薬事」とVŚPのチベット語訳校訂、[八尾2010, 2013]による根本説一切有部¹⁰の律蔵である『根本説一切有部律』『薬事』の和訳および考察があげられる。また、[奥山1998]ではヴァイシャリー疫病消除説話を枠物語として分析した上で関係経典の比較考察がなされている。奥山氏の研究では、「薬事」、VŚP、MN-A本に含まれるヴァイシャリー疫病消除説話の枠物語が対応することから、注釈者が知っていた『大護明陀羅尼』はVŚPとほぼ同内容であったと指摘されているほか、MN十萬註第2章の章題にVŚP原典の表題が残されていることについても言及されている。

上記研究では、MN十萬註第2章以外の章題や注釈書の構成、MN-B本の内容に関しては具体的に述べられていない。本論文では先行研究の成果を踏まえた上でMN十萬註の内容構造を解明し、本注釈とMN-A本、MN-B本、「薬事」、VŚPを相互に比較検討し、初期密教経典とヴァイシャリー疫病消除説話の関連性およびその特色について考察する。また、本論文資料編ではデルゲ版MN十萬註の経典引用部分のうちMN-A本と対応する範囲を抜粋・再構成した。

2. 疫病鎮静の機能を持つ2種の『大護明陀羅尼』

2.1 サンスクリット系統 (MN-A本)

MN-A本では、アーナンダがヴァイシャリーで蔓延している疫病を退散させるための陀羅尼(大護明陀羅尼)と儀礼を世尊から授けられ、それを実践する場面が説かれる。前述のとおり本経典のチベット語訳は存在しないとされるが、ヴァイシャリーで疫病が流行し釈尊が鎮静させる物語自体は『根本説一切有部律』『薬事』、VŚPのほか、『スッタニパータ』『ラタナスutta』(Ratanasutta, 宝経)や『マハーヴァストゥ』等の説話で知られている。特に「薬事」、VŚPの内容は陀羅尼呪の相違を除いてMN-A本と概ね共通している。

他方、世尊の滞在場所に関しては相違がある。「薬事」には、世尊がヴァイシャリーに向かう前に「ナーディカーのクンジカ堂(クンジカ・アーヴァサタ)」と呼ばれる土地に住していたことが示唆されている。VŚPでは「葦の中の紛乱した家¹¹」に住していたとあるが、「薬事」と同様の地名であることが[奥山1998:78-79]によって特定されている¹²。

10 根本説一切有部とはインドの部派仏教の一派であり、7世紀のインド内外において有力であったことが義浄によって伝えられている(八尾2019:1)。

11 “འདས་ལུགས་ཐོག་ནས་གཞིགས་པའི་འདུག་གནས་”

12 nādikāyām viharati guñjikāvasathe (もしくは kuñjikāvasathe)

[八尾2013: 111 注4]ではチベット語訳「薬事」にある「sgra sgrogs という仙人の住まい」drang srong sgra sgrogs kyi gnas = Skt: kuñjikāvasatha, Chin: 群氏迦堂とある。sgra sgrogs「声を発する」という訳はサンスクリット語の動詞「kuj-」の派生語であることが言及されている。本論文ではサンスクリット語の読み「クンジカ」を採用する。

それに対し、MN-A 本は「ラージャグリハ」が世尊の滞在地として示されている。具体的には、Skilling 氏の校訂¹³によるとカラングカニヴァーパ（竹林精舎）¹⁴、京都大学所蔵サンスクリット写本¹⁵には大寒林（śītavana）という火葬場（śmaśāna）とあり一定しない。「薬事」や VŚP と異なる理由は明確ではないが、「薬事」第 3 ウッダーナ冒頭で世尊はラージャグリハに住しており、ナーディカー等を経由してヴァイシャーリーに赴いた経緯が示されることから¹⁶、MN-A 本では「ラージャグリハ」が採用され、その後訪れた「ナーディカーのクンジカ堂」が省略された可能性も考えられる。なお、世尊がヴァイシャーリーに向かう経緯については MN-A 本と VŚP には示されていない。

2.2 チベット語訳系統（MN-B 本）

MN-B 本はチベット大蔵経において *Mahāmantrānūdāri sūtra* (*gSang sngags chen po rjes su 'dzin pa'i mdo*) という経題で収録されており¹⁷、本經典のサンスクリット経題音訳表記は、チベット語訳各版によって複数のバリエーションが存在する。具体的には、① *Mahāmantra-anudhāra-sūtra*（ナルタン版¹⁸）、② *Mahāmantra-anudhāraṇi-sūtra*（デルゲ版¹⁹・ラサ版²⁰）、③ *Mahāmantra-anudhāri-sūtra*（シェルカル写本シェイ版²¹・北京版²²）の 3 パターンが確認できる。なお、MNŚS の経題に含まれる対応部分は、④ *Mahāmantra-nuphāraṇi-sūtrām-*（デルゲ版²³）、⑤ *Mahāmantra-anudhāraṇi-sūtrām-*（北京版²⁴・ナルタン版²⁵）と記さ

13 (Skilling 1992:609)

14 [奥山 1998:77-78] では [Skilling C.1.1.a, C.1.1.b] にある 2 種の *nidāna* は本来的な文章ではないとして考察から除外されている。

15 (Goshima and Noguchi 1983, no. 63)

16 世尊は当初マガダ国の首都ラージャグリハのカラングカ・ニヴァーサ竹林に住していたが、デーヴァグッタにそそのかされたアジャータシャトル王子が世尊に象や獐猛な犬をけしかける等の不敬をはたらいた。世尊はこの王子を無根の信におくには時が至らないとして、シュラーヴァスティのジェータヴァーナに遊行した。その後、アジャータシャトル王子は自国に飢饉や汚染、魔物による疫病などの損失が生じ、母に諫められ、世尊をラージャグリハに呼び戻した。その後、世尊はヴェーヌヤシュティカー、パータリ村、クティ村を遊行した後、ナーディカーのクンジカ・アーヴァサタ（クンジカ堂）という土地に移動したと説かれている（八尾 2013: 81-128）。

なお、『根本説一切有部律』「薬事」、VŚP の成立過程に関しては VŚP が増広されて「薬事」が成立したのか、「薬事」から VŚP が抜粋されたのかについては明確ではない。先行研究では VŚP という經典が根本有部の阿含組織に属するものか、律から抄出された護呪經典であったのかは不明とされている（八尾 2010: 261）一方、VŚP がラクシャー（防護經典）としての呪句と偈頌の使用を第一目的として編まれたことから、「薬事」の抜粋によって作成されたという考察もある（奥山 1998:80-81）。

17 9 世紀前半にチベットで編集されたデンカルマ目録、パンタンマ目録では、「五大陀羅尼」*gzungs chen po lnga* というカテゴリのもと、本經典が収録されている（奥山 1998, 70, 芳村 1974, 148）

18 No.498, TBRC Resource ID: W22703(rgyud, pa 134b7-143b6 (vol. 92, pp. 270-288), *snar thang dgon pa, snar thang*)

19 No.563, TBRC Resource ID: W22084(rgyud, pha 150b2-156a7(vol.90, pp.300-311), *delhi karmapae chodhey gyalwae sungrab partun khang, delhi*)

20 No.522, TBRC Resource ID:W26071(rgyud, na 103a7-112b6 (vol. 90, pp.209-228), *zhol bka' 'gyur par khang, lha sa*)

21 No.535, TBRC Core Text Collection 10, TBRC Resource ID:W1PD127393(rgyud, na (vol. 90, pp.1159-1178))

22 No.181, D. Suzuki (ed.) *The Tibetan Tripitaka*. 1962. Peking Edition. 鈴木学術財団

23 No.2692, TBRC Resource ID: W23703(rgyud, du 241b1-282b7 (vol. 72, pp.484-566), *delhi karmapae chodhey gyalwae sungrab partun khang, delhi*)

24 No.3516, TBRC Resource ID: W1KG13126 (rgyud 'grel, ju 282b8-330b4 (vol.69, pp.568-664), *pe cing pho brang, pe cing*)

25 No.2315, TBRC Resource ID: W22704 (rgyud 'grel, ju 273a3-319b3 (vol.69, pp.549-642), *narthang*)

れているが、両者は Mahāmantra-anudhāraṇi- の誤記と思われる。その場合、②のデルゲ版・ラサ版の表記と共通する。一方で東北目録の表題では Mahāmantrānudhārisūtra- と記載されており、③のシェルカル版・北京版と同様である。rjes su 'dzin pa を還梵すると anudhāri となることから、本発表では③のシェルカル版・北京版のサンスクリット経題 Mahāmantra-anudhāri-sūtra を採用する。

MN-B 本の内容に関しては〔園田 2018〕において取り上げたため、ここでは簡略に述べる。MN-B 本は、ブラフマーが世尊のもとを訪れ世尊に明呪をお伺いする。その後世尊がアーナンダに対して、ブラフマーから明呪を乞われたことを述べ、病人の守護等の機能を持つ大護明陀羅尼を授ける場面が説かれている。上記の内容は、MN-A 本と同様に世尊がアーナンダに大護明陀羅尼を授けることが共通しているが、その背景はヴァイシャリーの疫病を鎮めるためではない。また、MN-A 本では世尊とアーナンダの対話が中心に構成されているが、MN-B 本ではアーナンダ以外の比丘の存在やブラフマー等の神々も登場している。両者の内容構成は大きく異なっていることから、両者の関係は増補もしくは省略された経典という関係には当たらないと推測される。

また、MN-B 本には鬼神の部族を知ることにより除災や守護が期待される機能が説かれているが、同様の場面は他の五護陀羅尼関連経典にも見られる。例えば『大寒林陀羅尼』の成立に影響を与えたとされる『檀特羅麻油述経』（4 世紀前半）では、世尊が鬼神を列挙した「仏辟鬼神呪」をラーフラに授けている。菊池氏の研究〔2016, 152〕では、サンスクリット・テキストの『孔雀王呪経』に守護者となる鬼神の名を覚えよとの記述があることが指摘されている。なお、密教経典以外にも、4 世紀初頭に成立²⁶した中国の道教経典『女青鬼律²⁷』にも記されている²⁸。初期密教経典成立期に含まれる 3～4 世紀前後には上記の機能が普及していたことが推察される。

3. 『大秘密真言随持経十萬註』（MN 十萬註）の構造

3.1 陀羅尼名の表記と本注釈書の内容構成

MN 十萬註の制作年代は 11 世紀初頭と見られており²⁹、『大随求陀羅尼』を除く五護陀羅尼の注釈書がカルマヴァジュラ (Karmavajra, Las kyi rdo rje) によって著されている。チベット語訳で「大護明陀羅尼」を示す rig sngags kyi rgal mo gsang sngags rjes su 'dzin ma³⁰ (明呪の女王秘密真言隨時) の表記に関して、本注釈書には rjes su 'dzin ma³¹ と rjes su 'dzin

26 (菊池 2016, 143)

27 鬼神の名を書写して身に着けたり、口に出して唱えることで鬼神を祓ったり使役するという (山田 2011, 12)。

28 300 年代の初期に書かれた『抱朴子』登涉篇の記述において鬼の名字を知れば鬼は自ら退くとあることから、『女青鬼律』もまたその信仰に基づいていたと見られている (山田 2011, 12-15)

29 (Hidas 2017: 451)

30 རྟེན་སྲིད་ཀྱི་རྩམ་སྲིད་ཀྱི་ལོ་ལྷན་པུ་འཛིན་མ་

31 རྟེན་སྲིད་ཀྱི་མ་

pa³²の2種類が混在している。「明呪の女王」とあるように、陀羅尼のサンスクリット語は女性系で表されることが多く、また、本經典はインド後期密教時代になると「マハーマントラヌサーリニー（密呪随時明妃）」と呼ばれる女尊として神格化される。本論文では經典の引用箇所を除き rjes su 'dzin ma と表記する。

MN 十萬註は9つの章 (gnas skabs) によって構成されており、その注釈対象は MN-A 本、B 本の内容を含んでいる。まず、第1章「場所と聴衆円満³³の時の章³⁴」と第2章「ヴァイシャーリーに入る（ヴァイシャーリー・プラヴェーシャ）の章³⁵」は概ね MN-A 本の内容と対応している。ここでは前項(2.1)で述べたように、世尊がアーナンダにヴァイシャーリーで蔓延している疫病を退散させるための陀羅尼および儀礼を受ける場面が説かれる。

続く第3～8章は連続して MN-B 本の内容と対応する。第3章「ブラフマーなどが明呪をお願いする章³⁶」では、ブラフマーやその眷属が世尊のもとを訪れ、明呪をお願いする場面である。第4章「ブータなどの性質の解説の章³⁷」は、大護明陀羅尼が過去・未来・現在の如来や阿羅漢等によって説かれることや、ラークシャサ女やヤクシャ等の鬼神の部族を知ることにより様々な恐れがなくなることが説かれている。第5章「業の異熟の解説の章³⁸」では、大護明陀羅尼によって、人や人以外の様々な鬼神の一切から守護し、破壊、退散し、また、毒がなくなるべきであるという。第6章「真理の偈頌の章³⁹」では傷つけようとする者や、マール、毘沙門天等をすべて陶醉させ、麻痺や怠惰、手足や心臓、舌を保護すべきであると説かれる。第7章「マンダラと守護輪の解説の章⁴⁰」では、真実と真実の言葉によって、足がない者や多足の者、知覚を持つ者や持たない者であれ、全てがこの名前を知られることにより守護するべきと示され、第8章「真理の言葉による病気の治癒の章⁴¹」では、四百四病が鎮まるように説かれている。

最終章である第9章「ヴァイシャーリーに入るブータらのために与えるための章⁴²」は再び MN-A 本と対応する。この章ではアーナンダが世尊から教えられたとおりに門のと

32 རྗེས་སུ་འཛིན་པ་

33 大乘經典の制作者がその冒頭箇所において明示する「五円満」に関する。五円満とは、「日時円満」(dus phun sum tshogs pa)、「説者円満」(ston pa phun sum tshogs pa)、「場所円満」(gnas phun sum tshogs pa)、「功德円満」(yon tan phun sum tshogs pa)、「聴衆円満」(khor phun sum tshogs pa)と呼ばれる五項目である(人見牧生 2008『大乘經典の冒頭部とその意義』大谷学報 87号 pp.52-54)。

34 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་གནས་དང་། འཁོར་ལྷན་སུམ་ཚོགས་པའི་སྐབས་ཏེ་གནས་སྐབས་དང་པོའོ།

35 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི། རྫོང་ཁྱེར་ཡངས་པ་ཅན་ལ་འཇུག་པའི་གནས་སྐབས་ཏེ་གཉིས་པོའོ།

36 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་ཚངས་པ་ལ་མོགས་པམ་རིག་ཐུགས་ལུ་བའི་གནས་སྐབས་ཏེ་གསུམ་པོའོ།

37 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་འབྲུང་པོ་རྣམས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་བཤད་པའི་གནས་སྐབས་ཏེ་བཞི་པོའོ།

38 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་མྱེན་བ་བཤད་པའི་གནས་སྐབས་ཏེ་ལྔ་པོའོ།

39 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་བདེན་པའི་ཚོགས་སུ་བཅད་པའི་གནས་སྐབས་ཏེ་དྲུག་པོའོ།

40 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་དཀྱིལ་འཁོར་དང་། སྤང་བའི་འཁོར་ལོ་བཤད་པའི་གནས་སྐབས་ཏེ་བདུན་པོའོ།

41 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི་བདེན་པའི་ཚོགས་གིས་ནད་པ་གསོ་བའི་གནས་སྐབས་ཏེ་བརྒྱུད་པོའོ།

42 རིག་ཐུགས་ཀྱི་རྒྱལ་མོ་གསང་ཐུགས་རྗེས་སུ་འཛིན་པའི། རྫོང་ཁྱེར་ཡངས་པ་ཅན་ན་ལུགས་པའི་འབྲུང་པོ་རྣམས་ལྱུར་བཤད་པའི་ལྷན་གནས་སྐབས་ཏེ་དགུ་པོའོ། (འཛིན་པའི་dzin ma'o の部分) に関しては、*འཛིན་པའི་dzin ma'i* (もしくは *འཛིན་པའི་dzin pa'i*) であれば他の章と同様の形式になるため、誤記の可能性が考えられる

ころへ赴き、門に足を置いて陀羅尼を唱えることが示されている。注釈書の引用は陀羅尼呪等の部分が省略され、内容が簡略化されている。一方、MN-A 本、「薬事」、VSP では、世尊が陀羅尼呪と作法の内容をアーナンダに授けた後、アーナンダが世尊から授けられた内容を一つ一つ実践している場面が説かれている。なお、第9章の經典引用箇所を終結部において、神々や有情が世尊の教えによって歓喜する場面はMN-B 本の記述と一部類似している。

以上のように、本注釈書はMN-A、B 本両者の内容が注釈対象となっており、冒頭にMN-A 本、中間部分にMN-B 本の内容が組み込まれ、終結部には再度MN-A 本の内容が示されている（以下、表2を参照）。

MN十萬註		MN十萬註の関連經典 (○印はMN十萬註と対応するもの)			
章題	引用經典の概要	MN-A 本	「薬事」	VSP	MN-B 本
[1] 場所と聴衆円満の時の章	葦の中の紛乱した家（ナーディカー村のクンジカ堂）に滞在 ⁴³ 。	○ ⁴⁴	○ ⁴⁵	○	シュラーヴァステイーのジェータヴァナ
[2] ヴァイシャーリーに入る（ヴァイシャーリープラヴェーシャ）の章	世尊がアーナンダに「ヴァイシャーリーに向かおう」と告げ、ウリジ国を経由してヴァイシャーリーのマンゴー林に滞在する。世尊はアーナンダに、ヴァイシャーリーの門の敷居に足を置き、陀羅尼を唱えるよう説く ⁴⁶ 。	○	○	○	—
	—	—	アームラパーリーとリッチャヴィ族が世尊を訪問	—	—
	世尊がアーナンダにヴァイシャーリーの疫病を鎮静させるための「大護明陀羅尼」と作法を授ける（A.3.16-17 欠）	○ (A.3.16-17 欠)	○	○	—
[3] ブラフマーなどが明呪をお願いする章	ブラフマーをはじめ、インドラ、四天王、ヤクシャの王やその眷属が世尊のもとを訪れ、偈を世尊に申し上げる。	—	—	—	○
[4] ブータなどの性質の解説の章	大護明陀羅尼は過去・未来・現在の如来や阿羅漢、ブラフマーやインドラ、四天王等によって説かれた明呪であることが述べられる。また、ラークシャサ女やヤクシャ等の鬼神の部族を知ることによって様々な恐れがなくなることが説かれている。	—	—	—	○
[5] 業の異熟の解説の章	大護明陀羅尼によって人や人以外の様々な鬼神一切から守護し、破壊、退散し、また、毒がなくなるべきであるという。	—	—	—	○

43 世尊の滞り場所等が説かれる因縁部分（nidāna）に相当する。具体的な地名についてはヴァイシャーリーやナーディカー等があり、經典や写本によって相違がある。また、説かれる「葦の中の紛乱した家」は「ナーディカーのクンジカ堂」と同意であることが特定されている（本論文2.1参照）。注釈によると、ヴァイシャーリーの中心部にあり、神やアシュラ等の人ではない者によって建造された宮殿で、四方が各25ヨージャナあり、柱や窓、鴨居、梁などがエメラルド、サファイヤ、金、サンゴ等の宝石で造られているという。

44 具体的な地名に関しては、Skilling氏の校訂（1992:609）ではカラランダカニヴァーパ、京都大学所蔵写本（Goshima and Noguchi 1983, no. 63）には大寒林（sītavana）という火葬場（śmaśāna）であることが示されている。

45 ラージャグリハのカランダカ・ニヴァーサ竹林、シュラーヴァステイーのジェータヴァナ、ラージャグリハ等を遊行する場面が説かれる

46 陀羅尼呪の部分は「ニルガッチャタ等である」等と省略されている。

[6] 真理の偈頌の章	大護明陀羅尼によって、傷つけようとする者や邪悪な心を持つ者、不利益を考える者、マール、毘沙門天等をすべて陶醉させる。また、麻痺や怠惰、手足や心臓、舌を保護すると説かれる。	—	—	—	○
[7] マンダラと守護輪の解説の章	真実と真実の言葉によって、足がない者や二足、四足、多足の者、知覚を持つ者や持たない者であれ守護するべきであるという。	—	—	—	○
[8] 真理の言葉による病気の治癒の章	誦誦の真実と真実の言葉そのものによってこの名を知られることで、四百四病が尽き、完全に鎮まるよう述べられる。	—	—	—	○
[9] ヴァイシャーリーに入るブータらのために与えるための章	アーナンダが世尊より大護明陀羅尼を授けられた後、ヴァイシャーリーに赴き、敷居を足においてからこれらの明呪と偈を唱える。	○	○	○	—
	諸仏世尊や神々の力で疫病が鎮められる。	○	○	○	—
	世尊が説かれた言葉によってアーナンダやブラフマー、世間が歓喜する。	—	—	—	○

表 2. 『大護明陀羅尼』注釈書および関連経典の内容構成比較⁴⁷

3.2 本注釈書に見られるマンダラや観想および神格化された陀羅尼の姿

本注釈書では、注釈対象となる経典の内容には含まれないマンダラの作壇法や観想法、神格化された『大護明陀羅尼』の姿等について解説されている。

第4章には人や家畜が病気になった際のマンダラや儀礼について注釈が示される。まず、境界で区切り、カディラ（檀木）のキーラ（楸）で書いてから四隅で結び、中心で一つに連結する。そして様々な種類の色という色によって囲み、勝者から教えられたようにマンダラを完全に造る。四隅に満たされた瓶を設置してから善男子善女人などに水を振りかけると、家畜の病気、人の病気、一切の恐ろしい病気が鎮められるという。そのほか、第7章のマンダラは観想法も併せて記される。まずマンダラは穏やかな地面で、一切の色で美しく描くべきであるという。正方形で四つの門があり、瓔珞や2つに分かれた真珠に飾られるという。次に観想について述べられる。はじめに虚空に風を形成し、火と水と土を形成し、須弥山の上の蓮華の上にある十字金剛や、二重金剛の金剛籠等を観想する、という。また、外周には護法神が坐し、四つの門に四天王も留まる等と述べられている。

神格化に関する記述は第9章があげられる。8世紀頃のインド後期密教において、陀羅尼は主に女尊として神格化され信仰の対象となった。『大護明陀羅尼』が神格化した「マハーマントラヌサーリニー明妃（密呪随時明妃）」もその一尊である。本注釈によると、アーナンダがヴァイシャーリーに赴いて世尊から授けられた明呪を唱えると、アーナンダの顔から10万の太陽が生じ、一つ一つの光線が忿怒相の明呪の女王大護明陀羅尼（マハーマントラヌサーリニー明妃）となって無数に放出され、ヴァイシャーリーに入る鬼神たちを取り除くという。また、同章ではその後「蘊界処」等について解説がなされ、「処とは「身処」であること」と示された後、尊格の具体的な身体的特色についての言及がある。ここでは対象の尊格について直接的に明示されていないものの、前後の文で明呪

47 この表は [Skilling1992] [奥山 1998] [八尾 2013]、D, No.606 P, No.308, D, No.562 P, No.180, D, No. 2693 P, No.3517, [園田 2016, 2018] を参考に筆者が作成した。表の () は Skilling1994 564-605 の見出し番号と対応する。

の心髓となる呪や特色について解説されていることから、マハーマントラヌサーリニー明妃の姿を示唆する記述と考えられる。注釈によると、「五智の自性、五仏の王冠を持ち、目は三眼、身色は緑色、顔は三つで、(中央の顔は緑色、)右が白色、左が赤色」等とある。また、「手は六臂のうち右の三臂に剣、十字金剛を持ち、施無畏印を結び、左の三臂に輪、検索、金剛を持つ。また、右足を伸ばし、左足を曲げ、蓮の上の月(輪)の座において日(輪)の光を持ち、微笑んだ顔で坐している」という。

上記のマハーマントラヌサーリニー明妃と推定される姿は、11~12世紀頃にインドの学匠アバヤカラグプタによって編纂されたインド後期密教文献に属する『成就法の花環』*Sādhanamālā* や『完成せるヨーガの輪』*Niṣpannayogāvalī* のほか、『西藏マンドラ集成』*rGyud sde kun btus* の記述とは一致しない⁴⁸。例えば、本注釈書における密呪随時明妃の身色は緑色だが、上に挙げた3つの観想法テキストにおける密呪随時明妃の身色は、青黒が2例、黒が1例、白が1例、赤が1例である。なお、五護陀羅尼に関連する明妃で緑色の身色とある尊格は、『孔雀王呪経王』が神格化された孔雀明妃が3例、『大寒林陀羅尼』が神格化された大寒林明妃が2例確認される。以上のように、MN十萬註にはマンドラの作壇や観想法、密呪随時明妃の姿等、インド後期密教的な要素に関連する記述が含まれている。

4. まとめ

2種の『大護明陀羅尼』のうち、MN-A本のチベット語訳は顕在しないものの、MN十萬註の注釈対象はMN-B本の内容のみならず、チベット語訳を欠くMN-A本をも注有していることが特徴的である。MN十萬註の構造は、冒頭の第1~2章と最終章である第9章にMN-A本、中間部にあたる第3~8章と9章の結末部分にMN-B本と相当する経典の内容が引用され注釈対象となっている。第2章と第9章にはVŚPの経題が用いられていることや、MN十萬註、VŚP、「薬事」で、世尊がヴァイシャーリーに向かう直前の滞在地として「ナーディカーのクンジカ堂」が示されていることから、MN十萬註が制作された頃の『大護明陀羅尼』は『根本説一切有部律』やVŚPの影響を受けていたことが考えられる。他方、チベット大蔵経で別個に収録されているMN-A本とMN-B本の内容が併せて注釈された背景については明らかではない。なお、五護陀羅尼に属する『大寒林陀羅尼』の注釈書も2系統の『大寒林陀羅尼』が含まれている。今回取り上げたMN十萬註も同様、当時同じ経典と見なされていた両経典がカルマヴァジュラの判断で合本されたか、もしくは、両経典の内容を有した経典が当時流布していた可能性がある。

また、MN十萬註は注釈部分においてマンドラや儀礼、経典の尊格といったインド後期密教的要素についても言及されている。特に『大護明陀羅尼』が神格化した密呪随時明妃の

図像的特色に関しては、『成就法の花環』、『完成せるヨーガの輪』等の記述に相違があることから、11～12世紀頃に編纂されたインド後期密教文献の内容とは異なるマハーマントラヌサーリニー明妃の姿をカルマヴァジュラが把握していたことが考えられる。さらに、「大護明陀羅尼」を唱えることでアーナンダの顔から放出した光が「密呪随時明妃」となり、ヴァイシャーリーに留まる鬼神を取り除くという場面から、11世紀初頭における陀羅尼經典の神格化の様相を窺うことが出来る。今後の課題として、初期密教經典の注釈書にみられる儀軌やマンダラ等の図像的特色等と、インド後期密教文献における記述を具体的に比較考察し、經典や自然現象が神格化された過程を明らかにしたい。

【資料編】 MN 十萬註における MN-A 本再構成テキスト

本資料編は『大護明陀羅尼』の注釈書である『大秘密真言随持経十萬註』（MN 十萬註）における經典の注釈対象のうち、サンスクリット系統の『大護明陀羅尼』（MN-A 本）内容に相当する經典引用部分を抜粋し、現在確認されていないチベット語訳 MN-A 本に相当するテキストとして再構成したものである。

今回の再構成にあたり、スキリングの校訂によるサンスクリット・テキスト MN-A 本、チベット語訳『ヴァイシャーリー・プラヴェーシャ』（VŚP）、『根本説一切有部律』「薬事」の記述を参考とし、省略部分や異同がある場合は注に示した。なお、シェー（/, shad）の異同については報告しない。[] 内の番号は MN 十萬註における章番号（本論文 3.1 参照）の見出しと対応する。

1. 使用テキスト

[チベット語訳]

MN 十萬註) གསང་མཁའ་མེད་མེད་ལུ་འཛིན་མའི་མངོན་འབྱུང་འབྲེལ་ 『大秘密真言随持経十萬註』

(*Mahāmantra-anudhāri-sūtra-śatasahasraṭkā*)

D, No. 2692 TBRC Resource ID: W23703(rgyud, du 241b1-282b7(vol. 72, pp.484-566), delhi karmapae chodhey gyalwae sungrab partun khang, delhi)

[サンスクリット校訂テキスト]

MN-A) *Mahāmantrānusāriṇī* (Skilling1994, 608-622)

[チベット語訳校訂テキスト]

Skilling) [Skilling1994: 564-607]

VŚP) *Vaiśālīpraveśa* ([Skilling1994: 564-607] のうち、偶数頁)

薬事) *Mūlasarvāstivādin-vinaya, Bhaiṣajyavastu* ([Skilling1994: 564-607] のうち、奇数頁)

2. MN 十萬註におけるチベット語訳 MN-A 本引用部分の抜粋・再構成テキスト

[1] ⁴⁹

འདི་སྐད་བདག་གིས་ཐོས་པའི་⁵⁰དུས་གཅིག་ན། བཙམ་ལྷན་འདས་འདམ་བུའི་ཚོད་ན་གཟིགས་པའི་འདུག་གནས་ན་བཞུགས་
ཏེ།

49 [Skilling1994, 608-622] A1.1-A1.2 に対応

50 𑖦 VŚP omit

དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་ཀུན་དགའ་བོ་ལ་བཀའ་སྩལ་བ་⁵¹། ཀུན་དགའ་བོ་ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་དུ་བྱོན་ནས་⁵²ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་ག་ལ་བ་དེར་དོང་དོ། བཅོན་པ་དེ་ལྟར་བཞུ་⁵³ཞེས་གསོལ་ནས་། ཚེ་དང་ལྡན་པ་ཀུན་དགའ་བོས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ལྟར་མཉམ་ཏོ། དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཡུལ་གྱི་རྩི་རྩི་ལུ་ལྷ་ཞིང་གཤེགས་⁵⁴། ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་དུ་བྱོན་ནས་། ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་གྱི་ཨ་མ་གྱི་ལ་མཉམ་པའི་ཚལ་ན་བཞུགས་སོ།།

[2] ⁵⁵

དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་ཀུན་དགའ་བོ་ལ་བཀའ་སྩལ་བ་། ཀུན་དགའ་བོ་⁵⁶ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་དུ་སོང་ལ་ཕྱི་ནས་སྒྲིའི་ཐེམ་པ་ལ་རྐང་པ་ལོག་སྟེ། གསང་ལྷགས་⁵⁷གཞི་འདི་དག་དང་། ཚོགས་སུ་བཅད་པ་འདི་དག་སྒྲོས་ཤིག་⁵⁸(བེ་ས་ར་བེ་ས་ར་བེ་ས་ར་ཏ་ལ་སོགས་པའོ།⁵⁹)

སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་ལ་ཐུགས་བརྩེ་བ་ཅན་གྱིས་བཀའ་སྩལ་ཏོ།། སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་དགོངས་པ་། རང་སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་⁶⁰བསམ་པ་། དབྱ་བཅོམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་⁶¹བསམ་པ་།⁶² ཉན་ཐོས་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བསམས་པ་། བདེན་པའི་ཚོག་དང་ལྡན་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བསམས་པ་། ཚོས་ཀྱིས་བསམས་པ་། ཚངས་པས་བསམས་པ་། ཚངས་པས་⁶³སོ་སོར་བསམས་པ་། འདོད་པའི་དབང་ལྷུག་གིས་བསམས་པ་། དབང་བོས་བསམས་པ་། ལྟས་བསམས་པ་། ལྟ་མ་ཡིན་གྱི་དབང་བོས་བསམས་པ་། ལྟ་མ་ཡིན་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བསམས་པ་། ལྟ་མ་ཡིན་གྱི་མངག་གཞུག་པས་བསམས་པ་⁶⁴འབྲུང་བོ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བསམས་པ་⁶⁵

སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་ལ་ཐུགས་བརྩེ་བ་ཅན་གྱིས་བཀའ་སྩལ་བ་⁶⁶།

སངས་རྒྱས་ལྟ་ཚེ་པོ་ལྟའི་ཡང་⁶⁷ལྟའི་ལྟ་མ་གཤེགས་ཤིང་། དབང་བོ་དང་བཅས་པའི་ལྟ་རྣམས་དང་། དབང་ལྡན་⁶⁸དང་བཅས་པ་རྣམས་⁶⁹། དབང་བདག་དང་བཅས་པ་རྣམས་དང་། སྟེ་དགྲའི་བདག་པོ་དང་བཅས་པ་རྣམས་དང་། འཇིག་རྟེན་སྦྱོང་བ་བཞི་པོ་དག་ཀྱང་⁷⁰། ལྟ་མ་ལྟམ་ཕྱག་དུ་མ་དག་དང་། ལྟ་མ་ཡིན་གྱི་དབང་བོ་རྣམས་དང་། ལྟ་མ་ཡིན་འབྲུམ་ཕྱག་དུ་མ་རྣམས་⁷¹ཀྱང་འོང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་མཛོན་པར་དང་པའི་འབྲུང་བོ་འབྲུམ་ཕྱག་ཀྱང་⁷²། མེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དོན་གྱི་ཕྱིར་འོང་སྟེ།

51 བ་ VSP pa

52 ཡངས་པའི་ཤོང་ཁྱེར་དུ་བྱོན་ནས། VSP omits

53 བཞུ་ VSP bgyi'o

54 གཤེགས་ VSP gshogs te

55 [Skilling1994, 608-622]A1.3.-A2.2., A2.4.-A3.19 に対応

56 MN 十萬註には 却 とあるが、VSP bo を採用した。

57 ལྷགས་ VSP snags kyi

58 VSP བེ་ས་ར་བེ་ས་ར་ཏ་བེ་ས་ར་ཏ་བེ་ས་ར་ཏ་

59 省略された呪に対して注釈がなされている。

60 སྟེ་ VSP kyis

61 སྟེ་ VSP kyis

62 བསམ་པ། VSP bsams pa| slob pa thams cad kyis bsams pa

63 བས་ VSP pa

64 བསམས་ VSP bsams pa

65 VSP では続けて「[bi sa ra ta| bi sa ra ta| bi sa ra ta| bi sa ra ta]」と呪が説かれるが、MN 十萬註では欠いている。

66 བ་ VSP to| mun tsa ta| mun tsa ta| ma 'dug shig| yams kyi nad rnam par zhi bar gyur cig| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta|

67 ཡང་ VSP yang lha|

68 དབང་ལྡན་ VSP tshangs pa

69 དབང་ལྡན་ VSP tshangs pa

70 རྩ་ VSP 'ong

71 རྣམས་ VSP dag

72 ཕྱག་ VSP phrag du ma dag

དེ་དག་⁷³ རྒྱུ་རྒྱུ་ལ་གཞོན་པ་ཆེན་པོར་⁷⁴ རྒྱུ་པར་འགྱུར་དུ་འོང་གིས།⁷⁵ (རིག་ཐུགས་ནི་ནིར་གཙོ་བོ་ལ་སོགས་པའོ།⁷⁶)
 ལྷུར་དུ་བྱེར་ཅིག། རྒྱུ་ཅག་ལ་⁷⁷གང་དག་ཐུང་བའི་སེམས་དང་ཐུན་པ་དེ་དག་ནི་ལུང་བར་གྱུར་ཅིག། གང་དག་བྱམས་པའི་སེམས་
 དང་ཐུན་ཞིང་། ཉེས་པར་མི་འདོད་ལ། ལྷུང་བར་འཇུག་པར་འདོད་པ་དེ་དག་ཀྱང་རྒྱུ་ཅག་⁷⁸ ལུས་ལ་ཡང་འཇུག་པར་གྱིས་ཤིག།
 སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་ལ་ལྷགས་བརྗེ་བ་ཅན་གྱིས་བཀའ་སྩལ་པ།
 (རིག་ཐུགས་ཀྱི་ཆོག་ནི་གང་ཞེ་ན། འདི་ལྟ་སྟེ། ལྷུ་སྲུ་སྲུ་ལ་སོགས་པའོ།⁷⁹)
 སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་ལ་ལྷགས་བརྗེ་བ་ཅན་། སེམས་ཅན་ཐུན་པར་ལ་མན་པར་སྟོག་པ་⁸⁰། དགོངས་པ་དང་ཐུན་པ་། བྱམས་
 པ་ལ་གནས་པ། ལྷགས་རྗེ་དང་ཐུན་པ་། དགའ་བ་ལ་གནས་པ། བཏང་སྟོམས་ལ་གནས་པའོ།⁸¹། གཤེགས་ཀྱིས་⁸²
 ཡི་ཤེས་⁸³ཀྱི་མཚོག་དང་། ཚོས་ཉེད་ཀྱིས་སྟེ་ཐུན་པ་དང་། འབྱུང་པོ་ཐུན་པ་དང་ལ་བཀའ་སྩལ་བའི་གསང་ལྷགས་ཀྱི་བཞི་⁸⁴
 འདི་དག་ནི་གྲུབ་པའོ།། ཚོགས་སྲུ་བཅད་པ་འདི་དག་ནི་གྲུབ་པའོ།།
 གང་ལ་སེར་སྟེ་རྣམ་ཆགས་པ།། རྣམ་བཅོམ་དྲི་མ་སེལ་⁸⁵མཛད་ཅིང།།
 ལྷགས་ཞི་གཞོན་པ་མི་མངའ་སྟེ་⁸⁶།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།
 འདྲེན་པ་གང་ཞིག་འགོ་བ་རྣམས།། ཐར་པའི་ལམ་དུ་འཇུག་བྱེད་⁸⁷ཅིང།།
 ཚོས་རྣམས་ཐུན་པ་སྟེ་⁸⁸།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།
 རྟོན་པ་འགོ་བ་⁸⁹རྣམས་ཀྱིས་བརྟེན་⁹⁰།། སེམས་ཅན་ཀུན་གྱི་དོན་གྱི་བྱིར།།
 གང་གིས་བདེ་བ་མངའ་མཛད་དེ།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།
 རྟོན་པ་གང་ཞིག་བྱམས་པ་ཡི།། ལྷགས་ཀྱི་⁹¹འགོ་བ་འདི་དག་ཀུན།།
 བྱ་གཅིག་བཞིན་དུ་རྟོག་བསྐྱངས་དེས་⁹²།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།
 གང་ཞིག་འཁོར་བར་འཁོར་བ་ཡི།། སེམས་ཅན་ཀུན་གྱི་རྟེན་གྱིར་ཅིང།།
 རྗེད་དང་དཔུང་གཉེན་གྱིར་བ་སྟེ།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།
 གང་ཞིག་ཚོས་ཀུན་མངོན་སུམ་གྱིས་།། གཙང་ཞིང་སྲུ་བ་མི་མངའ་ལ།།
 གསུམ་གཙང་གཙང་བར་མཛད་པ་སྟེ་⁹³།། རྒྱུ་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།།

73 དག་ VŚP dag gis
 74 གིས་། VŚP po
 75 གིས་། VŚP gyis| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta| nir gad tsha ta|
 76 MN 十萬註では「nir g(a)tstsha ta 等である」と呪が省略された上で注釈されている。
 77 ལ་ VŚP las
 78 ཀྱང་རྒྱུ་ཅག་ VŚP ni 'khod cig
 79 VŚP には「su mu su mu…」等の呪が説かれるが、MN 十萬註では「su mu su mu 等である」と注釈されている。
 80 བ་ VŚP par
 81 རྟོན་ VŚP omit
 82 ཀྱིས་ kyis kṣi phran nir gad tsha ta svāhā|
 83 ཡི་ཤེས་ VŚP sangs rgyas kyi ye shes kyi-
 84 བཞི་ VŚP gzhi
 85 རྟེན་ VŚP med
 86 རྟོན་ VŚP de
 87 རྒྱུ་ VŚP mdzad
 88 རྟོན་ VŚP de
 89 འགོ་བ་ rgyug pa
 90 ཀྱིས་བརྟེན་ VŚP kyi rten
 91 ཀྱི་ VŚP kyi
 92 དེས་ VŚP te
 93 རྟོན་ VŚP de

དཔལ་པོ་ཚེན་པོ་གང་སྐྱེས་པས། ལུན་སྤུམ་ཚོགས་དོན་འབྱོར་འགྱུར་ཞིང་⁹⁴།
 དོན་གྲུབ་ཚོགས་ཀྱང་གྲུབ་པ་སྟེ⁹⁵། བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།
 གང་ཞིག་སྐྱེས་པས་ས་རྣམས་ནི། །ནགས་ཚལ་བཅས་པ་རབ་གཡོས་ཤིང་།
 སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་དགའ་བ་དེས་⁹⁶། བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།
 བྱང་ཚུབ་སྟེང་པོར་གང་དག་⁹⁷གིས། ས་དག་རྣམ་དུག་གཡོས་གྱུར་ཅིང་།
 བདུད་ཡིད་མེ་བདེར་གྱུར་པ་དེས་⁹⁸། བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།
 ཚོས་ཀྱི་འཁོར་ལོ་བསྐོར་བ་ན། །འཕགས་བའི་བདེན་པ་རྣམས་གསུང་བ་⁹⁹།
 ལུང་པའི་མཉན་པ་གང་བྱུང་དེ། བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་བྱེད་¹⁰⁰པར་འགྱུར།
 ཡིད་འཕྲོག་གང་གིས་སྟེ་སྟེགས་བྱེད། ཐམས་ཅད་ཚོས་ཀྱིས་ལམ་མཛད་ཅིང་།
 ཚོགས་ཀྱན་དབང་དུ་མཛད་པ་དེ། བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད་པར་འགྱུར།
 སངས་རྒྱས་བྱིད་ལ་བདེ་ལེགས་མཛད། བརྒྱ་བྱིན་རྣམ་བཅས་བདེ་ལེགས་དང་།
 འབྲུང་པོ་ཀུན་ཀྱང་¹⁰¹བདེ་ལེགས་ནི། བྱིད་ལ་རྟག་ཏུ་སྐྱིན་གྱུར་ཅིག།
 སངས་རྒྱས་བསོད་ནམས་མཐུ་དག་དང་། །རྣམ་རྣམས་ཀྱིས་ནི་བསམ་¹⁰²པ་ཡིས།
 བྱིད་རྣམས་འདོད་དོན་¹⁰³གང་ཡིན་པ། དོན་དེ་དེ་རིང་གྲུབ་གྱུར་ཅིག།
 རྐང་གཉིས་བྱིད་ཅག་བདེ་ལེགས་ཤོག། རྐང་བཞི་བྱིད་ཅག་བདེ་ལེགས་ཤོག།
 བྱིད་ཅག་ལམ་འགྲོ་བདེ་ལེགས་ཤོག། བྱིར་འོང་དག་ཀྱང་བདེ་ལེགས་ཤོག།
 ཉིན་མོ་བདེ་ལེགས་མཚན་བདེ་ལེགས། ཉི་མའི་གུང་ལ་¹⁰⁴བདེ་ལེགས་ཤོག་¹⁰⁵།
 བྱིད་ཅག་ཀུན་དུ་¹⁰⁶བདེ་ལེགས་ཤོག། བྱིད་ཅག་སྲིག་པར་མ་གྱུར་ཅིག །¹⁰⁷

སེམས་ཅན་ཀུན་དང་ཕྱོག་ཚགས་ཀུན། འབྲུང་པོ་ཀུན་དང་བྱིད་ཅག་ཀུན།
 བདེ་བ་འབའ་ཞིག་ལྡན་གྱུར་ཅིག། ཐམས་ཅད་ནད་རྣམས་མེད་པར་ཤོག།
 ཀུན་གྱིས་བཟང་རྣམས་མཛོང་གྱུར་ཅིག། གང་ཡང་སྲིག་པར་མ་གྱུར་ཅིག།

འབྲུང་པོ་གང་དག་འདིར་ནི་རྣམས་གྱུར་ཅིང་¹⁰⁸། ས་ངང་བར་སྣང་དག་ལ་གནས་པ་རྣམས།

94 'འགྱུར་ཞིང་ VŚP gyur cing
 95 སྟེ་ VŚP de
 96 'དགའ་བ་དེས་ VŚP rab dga' de
 97 དག་ VŚP zhig
 98 དེས་ VŚP de
 99 གསུང་བ་ VŚP gsungs pa
 100 བྱེད་ VŚP mdzad
 101 ཀྱང་ VŚP gyis
 102 བསམ་ VŚP bsams
 103 འདོད་དོན་ VŚP don 'dod
 104 ལ་ VŚP la 'an
 105 ཤོག་ VŚP shing
 106 ཏུ་ VŚP tu
 107 VŚP の A.3.16., A.3.17. にあたる箇所はサンスクリット・テキストの MN-A 本および MN 十萬註では欠いている。
 108 VŚP

མྱེ་དག་རྣམས་ལ་ཉག་ཏུ་བྱམས་བྱེད་ཤོག། ཉན་དང་མཚན་དུ་ཚོས་ཀྱང་སྤྱོད་ལྱུང་ཅིག།

[9] ¹⁰⁹

དེ་སྐད་ཅེས་བཀའ་རྩལ་ནས། ཚེ་དང་ལྡན་པ་ཀུན་དགའ་བོས། བཅུན་པ་དེ་བཞིན་¹¹⁰ བཞིའོ་ཞེས་བྱ་བ་¹¹¹གསོལ་རྟོ་¹¹²
། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ལྷར་མཉན་ནས། ཡངས་པའི་ཤོང་བྱེད་དུ་སོང་སྟེ་སྣོ་ཡི་¹¹³ཐེམ་པ་ལ་རྟེན་པ་བཞག་ནས། གསང་ལྷགས་ཀྱི་
གཞི་འདི་དག་དང་། ཚེགས་སུ་བཅད་པ་འདི་དག་ཀྱང་སྣོས་སོ།¹¹⁴

【略号表】

MN-A	<i>Mahāmantrānusāriṇī</i> → Skilling, Peter.1994, pp.608-622, 『大護明大陀羅尼經』, 大正20, No. 1048
MN-B	<i>Mahāmantrānudāri sūtra</i> → <i>gSang sngags chen po rjes su 'dzin pa'i mdo</i> (D, No.563 P, No.181)
MN 十萬註	<i>gSang sngags chen mo rje su 'dzin ma' i mdo' i 'bum 'grel</i> (D, No. 2692 P, No.3517)
VSP	<i>Vaiśālīpraveśa</i> , Skilling, Peter.1994, pp.608-622 (偶数頁)
葉事	<i>Mūlasarvāstivādin-vinaya</i> , Bhaiṣajyavastu, Skilling, Peter.1994, pp.608-622 (奇数頁)

【参考文献】

- 奥山直司 1998「初期密教經典の成立に関する一考察」『インド密教の形成と展開：松長有慶古稀記念論集』法蔵館, 67-86.
- 川越英真 2005『dKar chag' Phang thang ma』東北インド・チベット研究会.
- 菊地章太 2007「『女青鬼律』の成立と初期道教における救済思想の展開」『東洋学研究』44: 374-396.
- . 2016「『道要靈祇神鬼品經』の成立と効鬼法の普及」『東洋学研究』53: 143-156.
- 園田沙弥佳 2016「『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavatī* 異本について」『印度学仏教学研究』65 (1) : 150-154.
- . 2018「『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī* 別本について」『印度学仏教学研究』67 (1) :170-175.
- . 2019「『サーダナ・マラー』における2種の五護陀羅尼マンダラ」, 『東洋学研究』56, 197-212
- . 2021「*Mahāśītavatī* の注釈書について—*Mahādaṇḍa dhāraṇī* との比較を中心に—」『東洋学研究』58: 169-185.
- 塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文編 1989『梵語仏典の研究 IV 密教經典編』平楽寺書店.
- 八尾史 2010「『根本説一切有部律』「薬事」における經典「引用」の諸相」『仏教研究』38: 251-279.
- . 2013『根本説一切有部律薬事』連合出版, 123-128.
- . 2019「根本説一切有部律薬事の新出写本」『仏教学』60: 1-19.

109 [Skilling1994, 608-622]A1.1-A1.2 に対応

110 དེ་བཞིན་ VSP de ltar

111 ལུ་བ་ VSP omit

112 རྟོ་ VSP te

113 སྣོ་ཡི་ VSP sgo' i

114 MN 十萬註第9章の結末部は、世尊が説いた話を聞き衆生が歡喜する場面はMN-Bの記述と一致する。
དེ་དག་ལྷགས་རྣམས་སྤུབ་པར་འགྱུར། བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དེ་སྐད་ཅེས་བཀའ་རྩལ་ནས་ཚེ་དང་ལྡན་པ་ཀུན་དགའ་བོ་དང་མཉམ་ཞེད་ཀྱི་བདག་པོ་ཚངས་པ་དང་ལྷ་དང་རྩལ་ཚེན་བཞིའི་ལྷ་རྣམས་དང་དེ་རྩར་བཅས་པའི་འཇིག་རྟེན་ཡི་རངས་ཏེ་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་གསུངས་པ་ལ་མཛན་པར་བསྟོན་དོ།

山田利明 2011 「鬼を責む—劾鬼の宗教的展開—」『東洋大学中国哲学文学学科紀要』19: 1-21.

芳村修基 1974 『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラ思想—』百華苑.

Goshima, Kiyotaka and Noguchi Keiya. 1983. *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters, Kyoto University. Society for Indic and Buddhistic Studies*, Kyoto University.

Hidas, Gergely. 2017. "Mahā-Daṇḍadhāraṇī-Śītavatī: A Buddhist Apotropaic Scripture." In *Indic Manuscript Cultures Through the Ages: Material, Textual, and Historical Investigations*, eds. Vincenzo Vergiani, Daniele Cuneo, and Camillo Alessio Formigatti: 449–486. Berlin: De Gruyter.

Skilling, Peter. 1992. "The Rakṣā Literature of the Śrāvakayāna." *Journal of the Pali Text Society* 16: 109-182.

———. 1994. *Mahāsūtras: great discourses of the Buddha*. Vol. 1, 2. Oxford: Pāli Text Society, 564-622.

Iwamoto, Yutaka. 1937a. *Beitrage zur Indologie*. Heft1, *Mahāsāhasrapramardanī (Pañcarakṣā I)*. Kyoto, Shōbundō.

———. 1937b. *Beitrage zur Indologie*. Heft2, *KLEINERE DHARANI TEXTE*, Kyoto: Shōbundō.

———. 1938. *Beitrage zur Indologie*. Heft3, *Mahāpratisarā (Pañcarakṣā II)*, Kyoto: Shōbundō.

キーワード：五護陀羅尼，初期密教經典，『大護明陀羅尼』，『說一切有部律』，

『ヴァイシャーリー・ブラヴェーシャ』